

浜の女たちと米騒動

女性史研究家・富山大学非常勤講師

浅 生 幸 子

かつて、米が人々の命の綱だった時代があった。米の値段をコントロール出来なかったために、人々が暴動化し、総辞職せざるをえなかった内閣があった。その大暴動のきっかけを作ったのが、富山県の浜の女たちだった。時の内閣を倒すという歴史に残る大事件だったにもかかわらず、当事者たちにそんな大それた思いはなかった。生きるために家族の食料を調達するという、任務に忠実だった女たちの真っ直ぐな行動にすぎなかったのだから。

真夏を思わせるような暑い日になった2002年5月のある日、私は、騒動の女たちの息づかいを聞

きたくて、発生の地富山県魚津市の浜を歩いてみた。海は、風で静かだった。名物の蟹気楼は、発生率が40%ということだったが、平日ということもあってか、人通りは少なかった。かつて十二銀行の倉庫として使用されていた建物は、水産会社として今も使われ、当時の面影をそのまま残している。その海岸側の板壁に、今は魚津市教育委員会によって、「米騒動発生の地」という説明が書かれた看板が架けられている。その隣には、当時の目撃者の証言によって描かれた米倉庫、騒動の人々の位置関係の絵図もある。さらに海岸よりには、かつて木柱であったが1998年、米騒動80年を

1. 記念石柱と第12銀行倉庫とその集辺



本 号 の 内 容

§ 浜の女たちと米騒動.....	1
	女性史研究家・富山大学非常勤講師 浅 生 幸 子
§ 技術相談問答のよもやま話 (3)	6
	独立行政法人 農業技術研究機構 野菜茶業研究所 研究技術情報官 農学博士 中 島 武 彦
§ 肥料と切手よもやま話 (1)	8
	越 野 正 義

2. 倉庫壁にかけられている看板



3. 石柱の裏側から海側を望む



4. 女たちが集まった海岸



記念して石柱に代えられた「発祥の地」と書かれた記念碑もあった。

海岸には、高い堤防が築かれ、冬の寄り回り波を防ぐテトラポットが沈められて当時の面影はなかったが、路地を抜けて町中に入ると、間口の広さは、当時とさして変わっていないと思われる家々が、通りに面して、肩を寄せ合うように立ち並んでいた。同じ町でも国道8号線を越えて南に広がる農村地帯とは、全く風景を異にしている。これだけ狭かったら、夫婦げんかも晩飯のおかずも、隣近所つつ抜けになるのも無理はない。互いに米びつの中まで、日々の暮らし向きが、わかってきたことだろう。昼下がり、どこからともなく風呂桶にタオルを持った男たちが、歩いてきた。路地の先の銭湯に行くらしい。かつての漁師町の銭湯が、そのまま残っているのだろうか。「おかかー、出んか。出んか。」という呼び声が、今にも聞こえてきそうなたたずまいが、時代を超えて

そこには残っていた。

米騒動のはじまり

大正7年(1918年)の夏は、このほか暑い日が続いた。一方、浜は近年にない不漁続きだった。そんな浜の町で、おかかたちの頭を悩ませていたのは、天井知らずの米の値上がりだった。年初めに一升24銭だったのが、6月末には30銭、7月半ばには35銭になり、下がる気配はなかった。

大正7年になってから、全国的に米価は前年の5割増にはねあがった。2年続きの豊作にもかかわらず。その主たる原因は、大手米穀商や地主層による投機的買占め、売り惜しみにあった。県内にも、1000石以上の保有米を倉庫に積んでいる地主兼米穀商がいた。これに対し、政府は、何ら有効な手立てを実行しないばかりか、シベリア出兵の計画を流布させて、商人たちの投機熱を高めた。その結果、ますます米価は高騰した。

当時、男の労働者の平均賃金は、一日50銭、女の内職や日当では、一升の米も買えなかった。海の男たちは、漁に出る日は、一日一升二合の米を食べるといわれ、そのエネルギー源の大半が、米であった。ただでさえ、漁師町では、7月、8月は、鍋に何も入れるものがなく、それを火にかけると鍋がわれてしまうことになぞらえて「鍋割月」と呼ばれているほどであった。深刻な生活難、食料難が広がっていた。

一方、米は豊作で、北海道を中心に多くの米が県外に運ばれていた。魚津港は県東部最大の米の積み出し港で、他に岩瀬、水橋、滑川、石田浜からも運び出されていた。水が貴重な時代、米を研ぐのも野菜を洗うのも、女たちは、共同井戸でやっていた。集まると自然に、米の話題になったことだろう。「米が高くてこまっとるがいね!」「あんたとも!」「おらともやで!」「わしら食べれんがに、米よそへやっとるがいね!」「ジョーキが来るたび米が高くなる!」毎日のようにこんな会話が、繰り返されたのではないだろうか。

5. 『富山県女性史』高井 進編 桂書房



米騒動のおかかたち

7月22日の夕方、「今度ジョーキが来たら、みんな米出さんように、男どもに頼まんまいけ」寄り合いでようやく女たちの気持ちがまとまった。仲仕の男たちも、みんな女房たちの顔見知りだった。翌23日早朝、北海道へ米を運ぶ伊吹丸が沖に姿を見せた。女たちは、「おかかでんまいけ!」「今日こそ米を積ませんようにせんまいけ」と浜に集まった。その数およそ50人。女たちは、米を運ぶ男仲仕たちの着物のすそをつかんだり、

米俵につかまって運ぶのを阻止する直接行動に出た。仲仕たちは、女たちのあまりの剣幕に、積み出しを中止した。伊吹丸も、その日の荷積みをあきらめて出港した。さらに、以前から女たちの不穏な空気を感じ取っていた警察も来たので、女たちもいったんは解散した。

しかしその夜、再び百数十人の女たちが、何隊かに分かれ米穀商に押しかけ、米を移出しないように訴えた。決して暴力的ではなかったが、生活を背負った者の切羽詰まった抗議には、迫力と底力があつた。これが全国を揺るがした米騒動の発端だった。

水橋、滑川でも騒動の火

魚津では、町役場が米の廉売補助など救済方法を示して、騒動は鎮静化しつつあつたが、27日、28日と東岩瀬町で、8月2日には泊町で女たちが役場や素封家に嘆願に出かける動きがあつた。そして、ついに3日西水橋で漁師の女房たち150人ほどが、米問屋や町の有志宅を訪ね、米を移出しないこと、米の廉売をすることを要求する集団行動が起きた。魚津から見ると、地理的には東から滑川、東水橋と来て白岩川をはさんで西水橋だ。西水橋の女たちが、魚津の騒動を知っていたとは思えない。新聞など読む機会のない女たちであつた。この時期、どこで起きてても不思議ではない深刻な状況にあつたのだ。

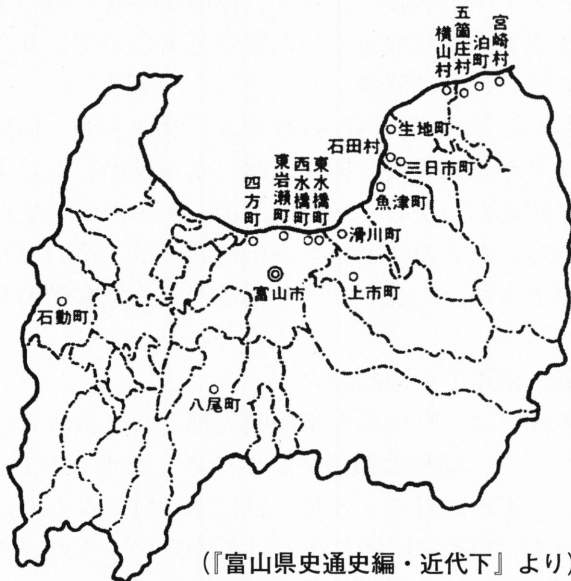
白岩川を挟み、東西橋で結ばれていた東水橋では、翌4日夜7時頃、女たち700人ほどが浜に集まり、町長、議員、米屋へと分かれて嘆願に行った。この騒動の中心になったのは、女仲仕たち。

水橋の浜では、魚津、滑川と違って、女も仲仕として働いていた。男仲仕が主に米を運び、女はまきや炭を運んだ。男は、一日50銭から1円稼いだが、女は30銭から50銭にしかならなかった。女仲仕たちの団結力は強く、仲仕の元締め水上ノブの号令ひとつで立ちあがったと言われている。女たちは、ノブを中心に神社の境内や浜で女房会議を開いて、作戦を練って組織的に行動した。

水上ノブは、当時60歳前後。「水上のおばば」と呼ばれ、親分肌で仕事のとりまとめがうまく、世話好きで統率力があつたという。ノブは、最初、男仲仕の協力も必要と考え、男仲仕の世話役にも

争議に出るよう頼みに行ったが、「男の出る幕ではないと断られ、女だけで行動を起こした。

6. 大正7年の米騒動発生地市町村略図



(『富山県史通史編・近代下』より)

一方、5日から動きが起きた滑川では、他の地域と違って米の移出中止に応じようとしない商人が多かったため、騒動が大きくなった。さらに6日に、沖に伊吹丸が停泊したため、米価に影響力があつた金川商店の倉庫前には、男たちも加わつた2000人も群衆が集まつた。口々に大声で、「悪代官」「悪徳商人」などとののしつた。浜の米集積所では、さらにすさまじく、米俵にしがみついたり、赤ん坊をせおつたままハシケの下にもぐりこんで、体を張つて米を舟に乗せないようにした。この時、騒動の中心になつたのは、川村サト、川村ツル、萩原サトなど漁師の女房たちで、男が加わつても主導権をとる事はなかつた。食べ物の話しや台所の窮乏は、女の問題で、男の出る幕ではなかつたのである。毎晩、「おかか行かっしゃらんか、行かっしゃらんか」の呼び声で、隣近所いっせいに騒動に加わつた。中には、つまはじきにされんようにと、連れ立って出た者もいた。しかし、さしもの滑川の騒動も、外米の廉売などの救済策が打ち出されたことから、8日には収束した。

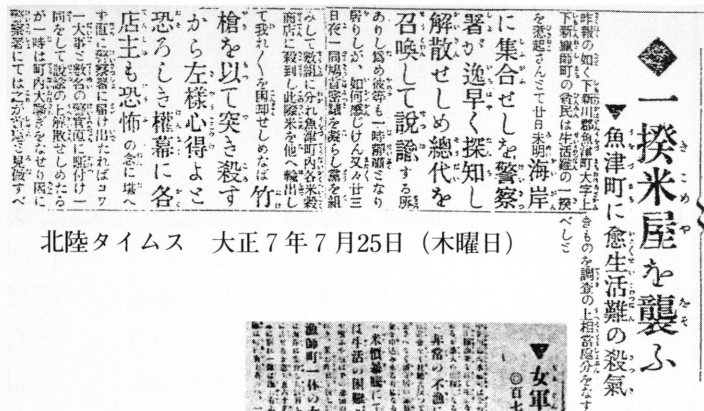
この後、県内では、富山市、石動町、三日市町、八尾町、上市町などでも起きるが、10月4日の宮崎村で終わりを告げた。

騒動の全国への波及とマスコミの役割

マスコミは、第4の権力だと言われる。情報網が発達すればするほど、その影響力を強め、意図するしないにかかわらず、人々の意識を左右する。米騒動が、全国へ拡大し激化するにあたって、明治末に大衆化し、発行部数を増加させていた新聞の果たした役割には、非常に大きいものがあつた。富山県内で起きていた騒動が全国に波及したのは、8月8日の岡山県が最初で、10日の京都と名古屋の騒動でいっきに全国1道3府38県に広がつた。その内22県で騒動が暴動化し軍隊が出動する大規模なものになつた。騒動に参加した富山の漁村の女房たちは、貧しくて新聞を読む習慣もなく、自分たちの行動が、全国に大きな影響を与えたことなど、あとあとまで知らなかつた。

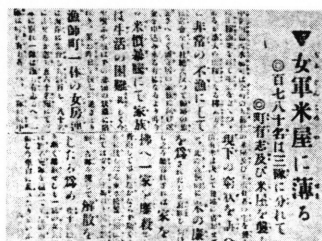
富山日報7月24日号「窮乏する漁民＝大挙役場に迫らんとす」、北陸タイムス7月25日号「一揆米屋を襲う」をはじめ「米は積ませぬ」「女房連の示威運動」「女群押し寄せる」などの見出しが、暴動、嘆願、殺気、不穏などの言葉とともに紙面を飾つた。とりわけ8月3日の西水橋の騒動を、高岡新報が「女群米屋に薄る」というセンセーショナルな見出しで全国に報道したことが、大きな影響を与えた。大阪朝日新聞、大阪毎日新聞など

7. 北陸タイムス 大正7年7月25日(木曜日)



北陸タイムス 大正7年7月25日(木曜日)

「女軍米屋に薄る」の見出しで米騒動を報ずる記事 (『高岡新報』大7.8.4)



は、これらを「高岡電話」「高岡来電」として連日報道した。京都日出新聞は、「越中には女たちの気概があふれている。しかるに京都の男たちは……」と男のふがいなさを嘆いた。

貧しい漁村の女房たちが、女だけで行動に打って出たという報道は、「越中の女一揆」として、全国に大きなインパクトを与え、鬱積していた社会不安に火を付けた。

米騒動とジェンダー

大正7年の米騒動は、富山県内19市町村で40件以上発生し、騒動参加者も全国に与えた影響力も最大である。しかし、明治以降、米騒動と言われる民衆の行動は、警察調査に限っても44回ある。この内、女だけによるものが22回、男だけのものが13回、男女によるもの5回、不詳4回である。とりわけ、明治23年、30年、45年の騒動は、大規模で県東部の中新川、下新川地帯は、米騒動多発地帯であった。米が高くなれば、女たちが、大挙して役場や米穀商に押しかけて、生活の窮状を訴え、それを受けた役場が救済措置を講じて収めるのが、常であった。だから、浜の女たちにとって、母親や姑たちから受け継いだ生活防衛手段の一つが、集団での嘆願行動だと見ることもできる。

「男は外で働き、女が台所を守る」という強い性別分業意識の下、限られた収入の中でやりくりをし、家族にひもじい思いをさせないのは、「女の甲斐性」だった。だから、米のことで、女が騒ぐのは当然のことであり、男の出る幕ではなかったのである。強いジェンダー意識に裏打ちされた漁村の女たちの行動が、「か弱い女たちが立ち上がったのだから、よほどのことだろう」という、これまた強いジェンダー意識にとらわれた都市部の男たちを騒動に立ちあがらせたのである。

浜の女たちが、ジェンダー意識にとらわれているからと言って、その勇気ある行動、果たした役割、歴史的意義は、決して低められるものではない。しかも、今回の米騒動が、それまでのものと違うのは、何人かの指揮者がいて隊列を組み、状況に見合った行動を2日から3日間やったことである。一回なら、自然発生的と見なすこともできるが、取りまとめ役がいなかったら、運動を継続させることはできない。さらに、滑川町が、戸数

8. 大正7年の米騒動

月日	事 項
7.23	魚津町、漁民婦女46人、米移反対で海岸に集合する。(米研)
7.27	東岩瀬町、婦女3~40人、資産家に救助を求める。(米研)
7.28	東岩瀬町、婦女3~40人、資産家に救助を求める。(米研)
8.2~4	東岩瀬町、20人、資産家に救助を求める。(米研)
8.3	泊町、婦女、道路に集合する。(米研)
8.3	西水橋町、婦女170人、米商に米移反対及び米の値下げを迫る。(米研)
8.4	東水橋町、漁民婦女・子供600人、米商に移出反対を迫る。(米研)
8.4	宮崎村、50人、米商に米の値下げを迫る。(米研)
8.4	生地町、婦女18人、役場に哀願する。(米研)
8.4	四方町、婦女50人、町長に救助を嘆願する。(証言)
8.5	生地町・石田村、婦女300人、米の積出しを阻止せんと浜に集合する。(米研)
8.5	泊町、婦女24人、汽車による米積出しを阻止せんと集合する。(米研)
8.5	魚津町、婦女100人、米商に米移反対の阻止を嘆願する。(米研)
8.5	横山村、婦女30人、米商に米移反対の阻止を嘆願する。(米研)
8.5	東水橋町、婦女200人、汽船・車両による米の積出し反対で集合する。(米研)
8.5	滑川町、婦女300人、町有志に救助、米商に米の廉売を要求する。(米研)
8.5	西水橋町、婦女250人、米商に移出停止・廉売を迫る。(県政史)
8.6	魚津町、数百人、米商に米の移反対を迫る。(米研)
8.6	生地町・石田村、汽船による米の積出し阻止で集合する。(米研)
8.6	東水橋町、漁民300余人、警察署・派出所に汽車による米の積出し阻止を迫る。(米研)
8.6	滑川町、2000人、汽船・汽車による米の積出しを阻止し、資産家宅を襲う。また、米肥会社に救助を迫る。(米研)
8.7	滑川町、6~700人、資産家宅前に集合し示威行動を行う。(米研)
8.7	魚津町、人員不明、町議に示威の途中阻止される。(米研)
8.8	滑川町、5~600人、汽船への米の積出し阻止で、資産家宅・警察署に示威行動を行い、町民30名が検挙され、取調べを受ける。(米研)
8.8	四方町、婦女5~60人、町長宅に哀願する。(米研)
8.8	富山市、婦女20人、市役所に哀願する。(米研)
8.9	新湊町、漁民婦女50人、集合する。(米研)
8.9	東岩瀬町、婦女7~80人、有力者に救助を懇願する。(米研)
8.10	生地町、婦女50人、車両への積出し阻止で集合する。(米研)
8.10	富山市、婦女100人、市役所に集合する。(米研)
8.11	富山市、婦女300人、市役所に集合する。(米研)
8.12	富山市、人員不明、市役所に集合する。(米研)
8.13	富山市、164人、市役所に集合する。(米研)
8.16	石動町、男子500人、米の廉売を要求し集合する。(県政史)
8.19	東岩瀬町、婦女200人、資産家宅に米の廉売を要求する。(米研)
8.19	三日市町、有志30人、集合する。(米研)
8.25	魚津町、5~60人、汽車への積出し阻止で集合する。(米研)
8.27	八尾町、170人、米の移反対で神社に集合する。(米研)
9.25	上市町、婦女子150人、米問屋2戸を襲う。(米研)
10.2	泊町、婦女5~60人、米問屋2戸を襲う。(米研)
10.3	泊町、人員不明、集合する。(米研)
10.3	五ヶ庄村、婦女20人、集合する。(米研)
10.4	宮崎村・泊町、漁民4~50人、米商を襲う。(米研)

米研…井上清・渡辺徹『米騒動の研究』第1・5巻有斐閣刊、証言…北日本新聞社『証言米騒動』
県政史…『富山県政史』第5巻(甲) (『富山県史通史編・近代下』より)

割(税金)三分以下の世帯を救済すると発表した時、「救済ではなく、米の安売りを求めているのだ」と女房たちは納得しなかった。この背景には、明治の騒動に比べ、社会的経験を積んだ地域の女性リーダーの存在があったからだと言える。

参 考 文 献

- 『証言 米騒動』1974年刊 北日本新聞社編
『ビジュアル富山百科』1994年刊
富山新聞社編
『富山県女性史』1987年刊 高井 進編
『魚津の米騒動』資料集 1999年刊
魚津市教育委員会